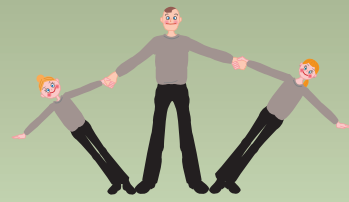


運動疫学 ニュースレター



平成 25 年 12 月 10 日発行 No. 2

運動疫学セミナー開催の報告

第 14 回運動疫学セミナー終了のご報告

運動疫学セミナー委員長, 埼玉県立大学保健医療福祉学部 北畠 義典

運動疫学研究会は平成 25 年 10 月 1 日より運動疫学会となりました。研究会として最後の第 14 回運動疫学セミナーが、8 月 25 日(日)～27 日(火)に東京の五反田駅前の TOKO HOTEL を中心に開催されました。今回も 3 つのコースを設定し、受講者 34 名(ベーシックコース 27 名、アドバンスコース 2 名、フリーコース 5 名)、講師(8 名)、アドバイザー(2 名)、事務局(2 名)の総勢 46 名の参加となりました。セミナーの最終目標は 3 日目午後の「研究計画の発表」を目指して、受講者がグループで計画を立案するというものです。そのために初日、2 日目夕方までに研究計画に必要な講義と最近のトピックの講演を受講し、2 日目夕方からの計画立案に備えます。ベー

シックコースはコホート研究 2 題、介入研究 2 題が発表されました。アドバンスおよびフリーコースでは講師から提供されたテーマを選択する新企画が加わり、この企画で 2 題が発表されました。

短時間での計画立案ですが、年々、発表内容が高度化している印象を受けます。詳細については運動疫学会のホームページをご覧ください。セミナー委員会では受講者がセミナーで学んだ知識や経験、さらにはここで知り合った仲間や講師陣とのネットワークを大切に、これからの研究活動に活用していただくことを望んで



おります。

今後も充実したセミナーを提供できるよう企画、運営を進めてまいります。来年度のセミナーは 8 月下旬に愛知県で開催する予定です。詳細が決まり次第、学会ホームページ等でお知らせいたします。多数の方のご参加をこころよりお待ちしております。

運動疫学セミナーに参加して

私は現在、東海大学大学院体育学研究科に所属しています。今回運動疫学セミナーのベーシックコースに初めて参加させて頂きました。運動疫学は難しい印象があり、参加に不安もありました。しかし、実際に参加してみると、先生方の分かりやすい講義のおかげで、基礎的なことから研究デザインの手法などを楽しく学ぶことが出来ました。また、グループワークでは、現場で働いている保健師や栄養士の方など様々な方との交流ができ、いい機会

となりました。今回知り合った方々とは、今後も繋がりを持っていけたらと思います。

私はこのセミナーに参加し、疫学をより身近なものに感じる事が出来ました。疫学は人々がより健康に生きていくために重要な役割を担っている学問だと思うので、より多くの方にこのセミナーに参加していただき、運動疫学に興味を持ってほしいと感じました。

今回素晴らしい経験をさせて頂いた

東海大学大学院体育学研究科 内山 舞

ことに、改めて感謝したいと思います。

本当にありがとうございました。



CONTENTS

1. 第 14 回運動疫学セミナー終了のご報告 … 1
2. 運動疫学セミナーに参加して … 1
3. 第 16 回運動疫学研究会学術集会の報告 … 2
4. 日本運動疫学会ホームページの紹介 … 3
5. 私と運動疫学 … 4
6. 最近の注目論文 … 4

運動疫学研究会学術集会の報告

第16回運動疫学研究会学術集会の報告

学術委員会委員長，独立行政法人 国立健康・栄養研究所 澤田 亨

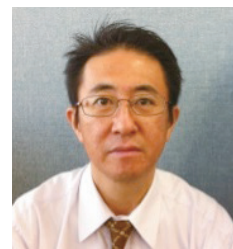
2013年9月20日（金）、運動疫学研究会としての最後の学術集会となった「第16回運動疫学研究会学術集会」が東京都新宿区にある独立行政法人国立健康・栄養研究所で開催されました。日本体力医学会にゆるやかに所属する研究会として、原則として日本体力医学会の前日に開催してきましたが今回もこれまで同様に前日の開催となりました。次年度も日本体力医学会が開催される場所（長崎市）で、前日（2014年9月18日）に開催される予定です。

さて、今回の学術集会（次回からは「学術総会」と呼び方が変わります）ですが、「運動疫学研究会のさらなる飛躍に向けて」をテーマにして開催されました。115人という多くの参加者

が参加され、学会化記念講演、教育講演、ランチョンセミナー、シンポジウム、一般発表、そして懇親会と、プログラム盛りだくさんの一日でした。一般発表においては7件の発表があり、榑崎兼司先生が優秀発表賞を、第14回運動疫学セミナーにおいて種田会長から依頼のあった研究課題に取り組むとともに、学術集会において完成した研究デザインを紹介された班員のみなさん（松下宗洋先生、佐藤慎一郎先生、平井一芳先生、涌井佐和子先生、山北満哉先生）が会長特別賞を受賞されました。

学会となった今、学術総会のあり方が再検討される時期に来ていると思います。これまでどおり教育講演やシン

ポジウムなどの教育的な内容を中心としたスタイルを維持していくのか、学会として一般発表を中心とした学術的なスタイルに変えていくのか、あるいは会場全体でディスカッションする場を数多く提供するスタイルにしていくのか、いろいろな考えがあると思います。日本運動疫学会の目的達成にどのようなスタイルが一番貢献できるのか、皆さま方と一緒に考えていきたいと思っています。



下光先生：学会化記念公演



会場の様子

運動疫学学術集会参加報告

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科，（独）国立健康・栄養研究所 松下 宗洋

第16回運動疫学研究会学術集会が9月20日に国立健康・栄養研究所にて開催されました。今回のプログラムでは、運動疫学研究の変遷、現状と課題、また最新の研究のトピックに触れることができました。

全てのプログラムが魅力的でしたが、特に「シンポジウム：我が国における身体活動奨励と健康」、「教育講演：座位行動と健康」が印象的でした。

シンポジウムでは、“健康づくりのための身体活動基準2013”などの身体活動と健康に関するエビデンスの構築と、そのエビデンスの活用について議論がありました。教育講演では、近年注目されている座位活動に関する研究の最新情報や、海外での研究生活の話も聞くことが出来ました。

私にとって、今回の学術集会は運動疫学研究の重要性を再認識し、今後必

要とされる研究について考える機会となりました。来年は学会大会となると思いますが、来年も運動疫学の研究者の方々と素敵な時間を共有できることを楽しみにしております。



日本体力医学会の参加報告

国立長寿医療研究センター 原田 和弘

2013年9月21日から23日に開催された、第68回日本体力医学会大会に参加しました。皆様ご存じのように、この学会は、我が国における関連分野の研究者が一堂に会する学会です。今年も、最新の研究動向に触れ、多くの方々との意見交換させて頂くことができました。

また、最新の研究動向だけでなく、研究が政策・社会に寄与する様子に触れる機会があることも、この学会の特

長の1つかと思えます。今年も、例えば、健康づくりのための身体活動基準2013やアクティブガイドに関する企画では、運動疫学分野の1つ1つの研究成果が集約されて政策に寄与するプロセスが、海外招待講演では、身体活動促進戦略を実現する手立てや課題が、それぞれ紹介されていました。

今回私は、東京医科大学の井上茂先生が企画者・座長を務められたワークショップ「身体活動促進のポピュラー

ション戦略」の演者の1人として、行動科学の観点から発表させて頂きました。おかげさまで、他の演者の先生方や、満員御礼となった参加者の先生方と、このテーマの重要性、現状、今後の方向性を共有できました。

次回の学会は、2014年9月19日から21日に、長崎大学で開催予定のことです。長崎の皆様にお会いできずことを楽しみにしております。

ワークショップ
会場



ワークショップ
会場での発表



日本運動疫学会ホームページの紹介

ホームページ管理運営委員会委員長、筑波大学医学医療系 中田 由夫



2013年10月1日の学会化を機に、従来の運動疫学研究会ホームページから、新しい日本運動疫学会ホームページへとリニューアルしました (<http://jaee.umin.jp/>)。見やすさと使いやす

さの向上を目指し、新しいロゴも作成しました。新しいロゴは、日本運動疫学会のミッションである「国民の身体活動促進への寄与」をイメージしています。学会化を機に、新たにホームペー

ジ管理運営委員会が発足し、その委員長を務めさせていただき



ことになりました。会誌「運動疫学研究」、学術総会、セミナーの他、学会活動に関わるさまざまな情報をいち早く会員・非会員の皆さまにお伝えできるよう、迅速に更新作業を進めてまいります。特に、会誌「運動疫学研究」の論文

はフリーアクセス化されており、会員・非会員ともに会誌ページから無料でダウンロードできます。日本運動疫学会の活動を知るためのツールとして、是非積極的にホームページをご活用ください。

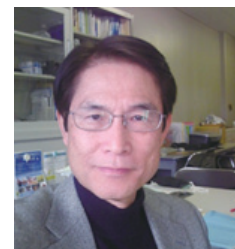
私と運動疫学

早稲田大学スポーツ科学学術院 荒尾 孝

私が、疫学の魅力や面白さを強く意識するようになったのは、40歳を過ぎた頃からでした。それまでは運動生化学分野の研究をしていました。当時、所属先の研究所で社会のニーズに対応した新たなプロジェクト研究として「高齢者の健康づくりに関する研究」を行うことになったことが疫学との出会いでした。そして、厚生労働省の科学研究費助成に初めて応募し、柳川先生の研究班に参加させていただくことになったことが大きなきっかけでした。当時、私は疫学についての知識を十分持たないまま、疫学の専門家の研究班に参加するというので、大きな不安を抱いていました。しかし、そのような不安は最初の研究班会議に参加したことで一掃されました。研究班

長の柳川洋先生をはじめ、研究班員の能勢隆之先生、児玉和紀先生、中村好一先生といった日本を代表するような疫学の先生方に研究仲間として本当に快く迎えてもらいました。また、日本の現代疫学の師である重松逸造先生と師弟関係にある多くの疫学者で構成されている「広島重松会」への入会もさせていただきました。このような経験を通じて、私はますます疫学が好きになり、新たに疫学分野の研究者として活動していくことを決意しました。そして当時、体力医学の学問分野として疫学が確立されていない状況を何とかしたいと強く思うようになりました。1996年に初めてACSMに参加した際、”Exercise Epidemiology”というセクションがあり、多くの研究発表が行われて

いました。その時、目前のもやもやが消え、なすべきことが明確に感じ取れたことを今もはっきりと覚えています。その後、体力医学会や疫学会の多くの先生方にご協力をいただき、2年後の1998年に下光先生と熊谷先生とともに「運動疫学研究会」を設立することができました。そして、研究会は設立後16年が経過した今年から、新たな飛躍を目指し、「日本運動疫学会」として再スタートする事となりました。若い世代の会員の方々の方々のさらなる活躍を大いに期待したいと思います。



最近の注目論文
Active Transportation and Cardiovascular Disease Risk Factors in U.S. Adults(Furie GL & Desai MM, Am J Prev Med 2012; 43(6):621-628.

福岡大学スポーツ科学部 山口 幸生

【背景】

徒歩や自転車での移動はアクティブ・トランスポーテーションと呼ばれ、健康づくりの重要なキーワードである。特に英国・米国では、肥満者の減少を目指して国策として精力的な取り組みが行われてきている。

【論文概要】研究デザイン：横断研究

本研究では米国の National Health and Nutrition Examination Survey

(NHANES, 2007-2010年) から成人9933名のデータを使用し、アクティブ・トランスポーテーションのレベルを3段階(なし:0 minutes/week, 低:1-149 minutes/week, 高: ≥ 150 minutes/week)に分け、呼吸循環器系の疾病リスクとの関係を分析している。用いられた統計手法は重回帰/ロジステック回帰分析である。調整因子は社会人口統計学的要因、喫煙状態、活

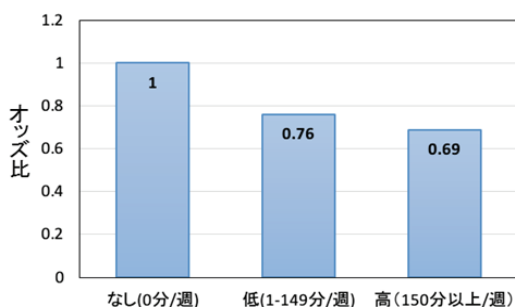
であった。糖尿病リスクは「低」が0.77(95%CI=0.58, 1.02), 「高」が0.69(95%CI=0.54, 0.88)であった。



以上から、健康づくりのためにアクティブ・トランスポーテーションを行う人の割合を増やす政策や環境を整備することは、適切な方法であるといえる。

【コメント】 今後は世界各国での縦断的な研究によるエビデンスの蓄積が求められる。

高血圧症リスクとアクティブ・トランスポーテーションレベルの関係



動的でない移動時間である。分析の結果、成人の76%は10分以上の日常的な移動で、歩くまたは自転車利用をしていなかった。BMIおよび腹囲は「低」「高」の集団が「なし」より低かった。高血圧症リスクのオッズ比は、「なし」を基準として「低」が0.76(95%CI=0.61, 0.94), 「高」が0.69(95%CI=0.58, 0.83)

発行：運動疫学研究会
日本運動疫学会事務局
〒466-8666 愛知県名古屋市中区八事本町101-2
中京大学工学部・ヘルスプロモーション(種田)研究室内
E-mail: jaee.info@gmail.com